

京都の改革

8

京都市の中学校には、通知表に反映されないテストがある。

京都市立九条中学校の2年生の教室で2月8日、担任教諭が「自己診断シート」を配り始めると、教室がどよめいた。「シート」は1月に実施した「学習確認プログラム」と呼ばれるテストの結果を示している。市内の中学生の中での成績位置や5教科の苦手分野がグラフでわかる。

「プログラム」は今年度から始まった。全市内統一のテストだ。中学2年は12月の1回、中学3年は年間4回、実施される。事前に予習用の出題範囲表が、結果が出ると、「シート」と一緒に復習用のドリルや解答と解説が配布される。

教育ルネサンス

No 521



「自己診断シート」を受け取る生徒（九条中で）



テストで勉強を習慣に

定期テストと違い、通知表や高校への内申書には反映されない。ねらいは、勉強の習慣づけ。生徒自身が課題を確認し、今後の学習に生かすための教材だ。

2年生約70人へのアンケートでは、塾に通っていない九条中の生徒は5割。大都市の公立中では多いほうだろう。9割が「復習ドリルを活用する」と答えた。

*

ここまでは来るとは、紆余曲折があった。

1993年、文部省（当時）の「業者テスト廃止」通知で、京都市も年8回の業者テストを廃止し、以降、市中学校長会主催で年5回の復習テストを実施してきた。しかし、問題作りの負担が大きい上に、出題レベルの偏りも出た。結果分析や復習の面倒見も不十分だった。回数もいつしか年3回に減った。

京都でも「公教育での学力保証」が課題となる中、校長会が「プログラム」の

検討を始めたのは2005年夏だ。「何とか復習テストを改善したい」との思いは一致していたが、テストを業者と共同開発することに拒絶反応も出た。

そこで、予習や復習をさせることに重点を置いた「プログラム」と位置づけた。学校間の比較データは出さず、輪切りによる進路指導をしないことも申し合わせた。

かつて「荒れ」が大きかった問題となり、生徒指導に時間を割かれることが多かった。

*

かつて「荒れ」が大きかった問題となり、生徒指導に時間を割かれることが多かった。

学力調査 文部科学省の調査では、2005年度に独自に小中学生の学力調査を実施した都府県政令市は50.33自治体が全員対象、17自治体が抽出調査だった。このほか、2、3年に1度の自治体もある。文科省は今年4月、小学6年と中学3年全員を対象にした全国学力調査を、国語と算数・数学で43年ぶりに実施。愛知県犬山市を除く全国の公立校のほか、約6割の私立校が参加する。

た九条中。「どの生徒も勉強をわかりたい」と切実に思っている。このプログラムで学習習慣がつけば、最低限の基礎は身につく。生徒指導も相乗効果でうまく回るようになってきた」と安達敏明校長（59）は見やる。

今では、生徒が静かに授業を受けているため、近所の人から「今日は学校、休みですか」と尋ねられるという。

生徒からも「ドリルで復習するうちに勉強法もわかってきた」（3年女子）、「プログラムで自然に机に向かうようになった」（3年男子）と評判がいい。

市教委は新年度から「プログラム」の実施回数を、これまでの5回から7回に増やす。義務教育の最終年度をきめ細かく指導するため、市の独自予算で、中学3年を30人学級とする。

「学校の勉強だけで希望の進路を実現すること」が次の目標だという。

（西堂路綾子）